

A c a n t h u s

新入生歓迎号

平成21年3月19日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会



合格者発表(3月11日)

合格が決まり、諸君は4月の入学式を経て、名実ともに土浦一高の生徒になりますね。去る3月2日、土浦一高は第108回目の卒業式を挙行し、345名が卒業しました。108年前の明治35年3月28日に土浦中学校第1回卒業生32名を送り出して以来、卒業生は29,892名となりました。この卒業生総数に土浦一高の長い歴史と伝統の重みを感じませんか。諸君もその伝統の一翼を担うはずですね。土浦一高進修同窓会も、諸君の合格を心から祝福します。

この機会に、土浦一高の前身、土浦中学校の生い立ちと草創期の様子を紹介しましょう。右下の写真は明治期の亀城の一角です。櫓門の左後方の建物は新治郡役所です。ここで土浦一高は、茨城県立尋常中学校土浦分校としてその産声をあげたのです。

教職員4名で開校

明治30年3月4日の茨城県知事の告示で、茨城県立尋常中学校土浦分校は、下妻分校と共に設置されることとなった。これに基づき、7日に郡役所二階で事務を開始した。14・15の両日、入学志願者193名に対し、土浦高等尋常小学校校舎を借りて選抜試験を行い、18日、80名に入学を許可し、5日後の22日に授業を開始した。大変慌ただしい開校であった。しかも生徒を収容し授業を行うべき校舎を持たずにである。

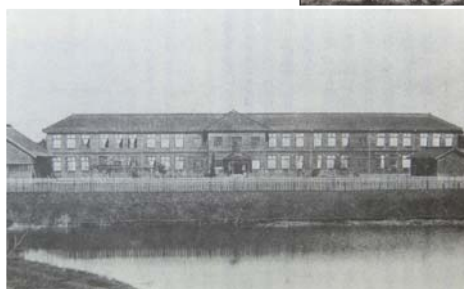
教職員は、分校主任(倫理・英語・国語担当)と体操担当・算術担当の教師3名、それに書記1名の計4名であった。同年8月に博物担当の教師が赴任して加わったが、僅か5名

亀城櫓門と
新治郡役所 →



← 立田町に完成した新校舎
(現土浦二高旧校舎)

(昭和44年に取り壊された)



さまざまえる土浦分校

独自の校舎が無いまま開校した土浦分校は、仮住まいを余儀なくされた。開校直後は郡役所二階で授業を行ったが、2ヶ月後には土浦尋常小学校校舎の一部を借用して移転した。開設翌年、翌々年と新入生の受け入れに伴って、事態は益々深刻になり、教場を求めて転々と彷徨った。32年9月には大雨により霞ヶ浦が氾濫。内西町の仮校舎は浸水し、10日間も臨時休業に追い込まれるなど苦勞の連続であった。

土浦分校の校舎建設が進まず、仮住まいを繰り返していた背景には、当時の土浦町と真鍋町との間における中学校誘致を巡る激しい争いと県議会議決の二転三転があった。

立田に待望の校舎完成

県議会は最終的に真鍋台建設を可決したが、県当局はこの建議を採用せず、校地を土浦町立田に決定した。そして明治32年12月ようやく新校舎は完成。

洋風二階建て本館1棟と生徒控所兼雨天体操場1棟からなり、本館には8教室と二階中央に講堂が設けられた。分校創設以来、学び舎が定まらず、三ヶ所に分設された教場で不便な学校生活を余儀なくされていた生徒たちは、やっと安住の地にたどり着いたのである。同年12月21日、広大な立田校舎に移転し、一同歓喜に浸った。その感動は「進修」創刊号(明治33年1月発行)に詠い上げられている。

『立田の臆間、数字巍然として高く雲間に聳ゆるもの、是れなむ我が茨城県中学土浦分校なる。長の年月待ちに待ちたる新しい学び舎なる。』

しかし、結果的には、ここも数年間の仮住まいでしかなかった。現在の真鍋台校舎が完成(明治37年12月)し、移転(明治38年3月)するまで、なおしばらく流離いは続いたのである。

「進修百年」(創立百周年記念誌・平成9年11月1日発行)によれば、土浦中学校の基礎は、図書館の開設、運動場の整備、校訓の制定、寄宿舎の建設などが進められた明治40年代に確立されたと記している。

これに先立つ明治30年代はまさに完全無からの出発で、幾多の困難や障害を一つひとつ克服しながら、本校の礎を築いた時期と言える。

この先人たちの学校創設に注いだ努力と情熱によって、学校としての確固たる基盤と理念が形成され、これが後々に受け継がれ、大正・昭和期には県下の名門校としての土浦中学校に、現在では全国的な公立高校の雄としての土浦一高に発展したのである。

約三万に及ぶ先輩たちが培ってきた伝統を継承し、土浦一高の更なる飛躍を担うであろう君達に期待したい。



平成21年度 入学式(4月7日)

本校は、今月22日に、第112回目の創立記念日を迎えます。学校設立の経緯等については、昨年4月発行のAcanthus第1号に述べましたので省略します（一高同窓会のホームページを参照してください）が、この機会に開校直後から教師や生徒たちが組織化に努めてきた「進修会」を取り上げてみます。「進修会」、「進修」について理解を深めて欲しいと思います。

ところで、Acanthus第11号で、「進修会」について「進修臨時発行 創立十周年記念録」の中で、『正科を筋骨とすれば、この会は血脈である』と述べ、学校生活に占める役割を高く評価していることを紹介しました。また、昨年6月の第3号で、『乱暴な言い方であるが、今の生徒会に似た“進修会”を発足させた』などとも記しました。

進修会々々則

- 第一条 本會ハ進修會ト稱シ茨城縣中學校土浦分校内ニ置ク
- 第二条 本會ノ目的ハ徳智體三育ノ趣旨ニ基キ文武ノ學藝ヲ講究シ兼テ相互ノ交誼ヲ敦睦ニシ以テ當校ノ教養ヲ輔翼シ校風ヲ懿美ナラシムルニアリ
- 第三条 本會ハ左ノ三種ノ會員ヲ以テ組織ス
 - 一、特別會員 當校職員
 - 二、贊助員 嘗テ當校職員タリシモノニシテ本會ノ目的ヲ賛成スルモノ
 - 三、通常會員 當校生徒
- 第四条 本會ニ左ノ三部ヲ置ク
 - 一、雜誌部
 - 二、演說部
 - 三、體育部
- 第五条 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 當校主任教諭ヲ推ス
 - 副會長 一名 當校職員中ヨリ會長之ヲ委嘱ス
 - 幹事 若干名 當校職員中ヨリ會長之ヲ委嘱ス
 - 委員 若干名 通常會員中ヨリ之ヲ選定ス
 - 會計掛 一名 當校職員中ヨリ會長之ヲ委嘱ス
 - 第六條 役員ノ職掌ヲ定ムル事左ノ如シ
 - 會長 本會ヲ總管ス
 - 副會長 會長ヲ輔佐ス
 - 幹事 各部ノ事務ヲ管理ス
 - 委員 會長并ニ各幹事ノ指揮ヲ受ケ各部ノ事務ヲ掌

師弟相親しむ学校生活と

進修会の発足

入学後自然に生徒の間の交友関係は深まり、授業が始まって10日も経たない4月30日には、「相寄つて親睦を計る」集まりがもたれた。分校創設当初は、教職員も生徒も少なく、学校生活が家族的な雰囲気の中に満ちていたこともあって、親睦の輪は急速に生徒間に広まっていた。特に「師弟相親しむ相談じ、教室以外の知識を得るも以てその目的」とした茶話会がよく行われ、生徒の大きな楽しみの一つであったようである。そこでは、教員の訓諭・演説、生徒の余興などがあり、茶菓が出るころになると剣舞・詩吟・滑稽に打ち興じたという。一方、体育会もできて撃剣・柔道・野

球などが盛んに行われた。やがて一回生の中山庄一郎（後、土浦中学校教師）ら有志数人が茶話会・体育会を一つの組織に統合して「進修会」を発足させ、会則も整えて、明治30年12月（31年説もある）に発会式を挙行した。

進修という語は、「易経」の『君子進徳修業』に採ったものである。発会に当たって、畑分校主任は、本会は航海者の羅針盤のように肝要なもので、その主旨を体し、正課と相俟ちて知・徳・体に勉め励むよう訓示している。「進修」第壹号（明治33年1月発行）に載っている「進修会」会則（上の資料はその一部である）によれば、

- 會員は 特別會員・・・当校職員
- 贊助員・・・嘗ての当校職員
- 通常會員・・・当校生徒

部会は 雜誌部 學術の研究知識の交換と本會一般の記録及報道の機関とし、発刊する雜誌を進修と稱し、その誌面を分けて論說・雜録・文苑・雜報の四欄を設ける

演說討論部 知識の交換・弁舌の練磨を目的とする

体育部 心膽を練磨し身体を強健にするを目的とし、撃剣柔道部・野球遊技部の二科をおく（以下略）

などと会の目的や活動内容をしっかりと規定している。こうして組織化された進修会は、生徒の自治活動の拠り所となり、また土浦中学校の教育活動の一翼を担うまでに成長発展した。雑誌部は、そうした土浦中学校の活動状況を機関誌「進修」に収録し、発行を続けてきた。全49巻に及ぶ「進修」は、旧制土浦中学校の歴史を今に伝える貴重な資料となっている。

「進修」第壹号

開校3年度の明治33年1月、進修会雑誌部によって「進修」は創刊された。

国漢科教師名越時孝の手になる漢文体の序文に始まり、論説では特別會員の高野虎次郎の「美学と幸福」が巻頭を飾った。雑

「進修」創刊号表紙



録には「子午線の話」や「崎浜の横穴」（共に特別會員）、「小松の貝塚」（生徒）など当時としては新しい考古学に関する学術的な文章も見られる。文苑には紀行文や作文・伝記・和歌などが掲載されている。雑報には、明治30年から32年までの主な学校行事が列挙されている。進修会発会式、第九・十回茶話会、春季修学旅行、春季・秋季運動会、第一回演說討論会、入学試験、修業証書授与式、教員の異動等々が記載されている。

「進修」はこの第壹号発刊以降、昭和18年2月発刊の第四十六号まで続いたが、太平洋戦争の激化に伴う学徒動員や物資不足のため、休刊するに至った。戦後、昭和24年に復刊され、3号まで出されたがその後は廃刊となった。

戦後までを含め、全49巻が刊行されたわけだが、現在、本校で保管しているのは48巻である。第三十七号（昭和8・9年頃発行）のみが欠落している。何とも残念なことである。

ともあれ、進修会を核に、生徒たちが主体的に積み上げてきた数々の実績が堆積して、土中そして土浦一高の歴史と伝統が形作られてきたのである。

お願い
「進修」第三十七号について、その所在等の情報をお持ちの方は、一高同窓会までご連絡ください。
〒Acanthus 600016 一高同窓会ホームページにアクセスしてください。



校歌碑 ↑

楠の若葉が輝く季節になり、今年も本校生にとっては最大のイベント・一高祭が近づいて来ましたね。昨年は本校史上最大の来校者があったとのこと、年々賑やかになってきているようです。こうした学校行事に欠かせないものの一つに校歌があります。ところで諸君は旧本館前校庭の一角に『沃野一望数百里…』の校歌の碑が建っているのをご存知でしょうか。これは、進修同窓会結成25周年を記念して、昭和38年に本館玄関前に建設されたものです。この碑は、昭和62年、学校創立90周年を機に整備された旧本館玄関前左側の庭園に移され、もとの姿をとどめています。今号では、この校歌について考えてみたいと思います。

誕生直後の校歌（「進修」第14号に掲載）↓

沃野一望数百里 そより立ちたり筑波山 湛へて寄する瀧波は	二	春の彌生は櫻川 流に浮ぶ花筏 渡る雁聲ひえて	三	此の山水の美を享けて 此の秀霊の氣を享けて 東國男児の氣を享けて	四	筑波の山のいや高く 嗚呼櫻水の旗立てて 龜城五百の健男児
關八州の重鎮として 空の碧をさながらに 終古流らぬ霞浦の水		其の源の香を載せて 蘆の枯葉に秋立てば 湖心に澄むや月の影		我に寛雅の度量あり 我に至誠の精神あり 我に武勇の氣魂あり		霞ヶ浦のいや高く 我 校風を輝かせ 龜城五百の健男児

旧制中学校校歌

明治四十年代に続々誕生

今年、卒業四〇周年の祝賀式に出席された高21回の松井泰寿氏（守谷高校長・元本校教諭で『進修百年』の編纂に携わる）は、本校では創立十数年後の明治44年にやっと校歌が制定されたが、どうしてなのかと疑問を呈されていた。調べてみると、明治期に創立した旧制中学校では、校章は創立時に制定されているが、校訓や校旗、校歌は創立後相当の年月が経ってから制定された学校が多いようだ。

水戸中学校（明治11年創立）の校歌が誕生したのは明治41年（1908）であり、本校と同時に創立した下妻中学校では明治43年につくられている。全国的に見ても熊本県立熊本中学校は、創立十周年を記念して明治43年に、明治32年創立の三重県立第三中学校（現上野高校）の校歌も明治41年に制定され、その多くは明治四十年代前半につくられている。その理由についてはよくわからないが、下妻中学校の分校として明治33年に創設された水海道中学校も、校歌ができたのは明治43年であり、『済美百年』（水海道一高百年史）に校歌制定

について「いずれの中学校も校歌誕生までに一〇年以上の歳月がある。これだけの年月を経ればその学校の教育目標や方針も確立、校訓や校是の制定し、校風も生まれるからそれを校歌に詠って学校への所属感や一体感をいっそう強めよう」という機運が生じたのであろう」と記している。

自前の土浦中校歌

当時、校歌を作成するには作曲という困難な壁があった。したがって多くの学校では校歌づくりを専門家に依頼している場合が多い。熊本中の校歌は作詩・作曲ともに専門家の手になるもので、特に作曲者は「春の小川」や「朧月夜」などで知られる岡野貞一である。水海道中の校歌も作詞家は東京音楽学校（現東京芸大）の国文学教授、作曲者も同校助教であった。

また、水戸中のように当校教師が作詩を担い、作曲は外部の専門家に依頼するというケースも多い。水戸中校歌は師範学校音楽教師が作曲したものである。

三重県の上野中も同様で、作詩は博物担当の教諭だが、作曲は東京師範学校教員で、「一寸法師」や「青葉の笛」など明治の名曲を数多く作曲した田村虎蔵である。

こうした中で下妻中の校歌は異色なものといえよう。当時五年生二人の合作で横瀬夜雨が筆を加えた詩を、旧制一高の寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」の曲にのせて、生徒たちの間で自然に歌われ続けていくうちに校歌として認知されていった『為校百年史』という。そういえば、竜ヶ崎中の校歌も同様に、曲は旧制一高寮歌「アムール川」のものを借用している。

その点からすれば、土浦中の校歌はその作成過程からみて健全なものである。歌詞は生徒の公募によるもので、入選した四年生堀越晋の詞を本校教諭尾崎楠馬が補筆し、作曲した。国漢科主任でありながら、音楽にも堪能な尾崎青年教師の存在が、自前の校歌誕生を可能にしたのである。

歌われなかった三番

本校校歌は、一番で、筑波や霞浦の雄大な自然を、二番では、郷土の美しい季節の移ろいを、三番で、この素晴らしい風土に培われる若人の心意気を、そして最後の四番で、この学び舎での青春を誇らかに歌い上げている。制定以来歌い継がれてきたこの校歌は戦後、しばらくの間、三番が姿を消した。終戦後、戦前・戦中の軍国主義教育を排除し、民主化を進めるといふ政策のもと、全体主義的なものはタブーとされたのである。三番の「東國男児の氣を享けて 我に武勇の氣魂あり」というフレーズがこれに抵触するということ

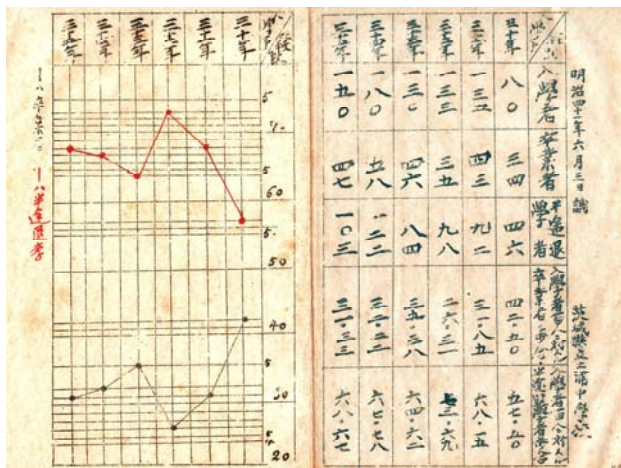
で三番が歌われなかったのである。水戸一高の校歌は、左に掲げたような歌詞であったがため、自主規制によって戦後は全く歌われず、昭和25年ごろから、一番だけ歌われるようになった。一・二番とも歌われるようになったのは四〇年代後半からである『水戸一高百年史』という。本校でも三番が復活し、全節歌われるようになったのはやはり昭和四〇年代になってからである。

それにしても、本校校歌の三番は全歌詞の主題をなす部分である。これを欠いた校歌しか歌えなかった当時の生徒たちが、三番の存在を知ってどんな感慨をもったであろうか。ともあれ、本校の校歌は生徒によって生み出されたものであるだけに、説教がましくなく、曲も簡潔で歌いやすい。それでいて伝統校としての風格を感じさせる校歌である。

水戸第一高等学校校歌

古賀快象 作詩 片岡龜雄 作曲

- 一 旭輝く日の本の 光栄ある今日のものとは 義人烈士の功績ぞ 忠孝仁義の大道を 貫く至誠あるならば 天地も為に動きなん
- 二 世界にきおつ列強と ならびて進む帝国の 基礎は堅忍力行ぞ 花朝月夕つかのまも 古人に恥じぬ心して ゆめ怠るな一千人



半途退学者調 (明治41年6月調査) ↑

明治35年3月に土浦中学第1回生34名が卒業しました。明治30年4月の入学時には80名でしたから、卒業までに48名が途中で退学していることとなります。中途退学者の入学者に占める割合は58%となります。明治後期(30年代、40年代)はこの6割を超える状態が続きました。このこと及びその背景についてはAcanthus10号(2月17日発行)で簡単に触れました。今回はさらに踏み込んで、全国的な視野から考察してみましよう。そしてそれを通して明治後期の中学生の学校生活の一端を紹介できればと思います。

「半途退学者調」

旧本館資料室に「半途退学者調」(当時中途退学者をこう呼んだという資料が二つ展示されています。これらは第七回生(明治3年入学)を除く第一回生から第十一回生(明治40年入学)までの入学数と卒業数、中途退学者数およびそれらの入学数に対する割合を記した資料です。入学数は年度によっていくらか違いますが、中途退学者の割合はいずれも0%を超えています。第三回生(明治32年入学)はその割合はなんと3%でした。

これらの数字は何を物語っているのでしょうか。資料「半途退学者調」には退学の原因として、家事都合・成績不良・転学の三つが挙げられています。しかしそれぞれの人数までは記されていませんので、何が大きな原因であったのかよく分かりません。なぜこのように多くの中途退学者が出たのか、他の中学校ではどうだったのか、また、これらから明治期の中学校生活について何かを読み取れないものか気になるところです。

この疑問を考えるのに『文明国をめざして』(牧原憲夫著、小学館)、『試験と競争の学校史』(斎藤利彦著、平凡社)の二冊はいろいろな示唆を与えてくれます。特に斎藤氏の研究書には負うところが大きかったです。

明治前期の小学校と試験

文部省が明治5年に頒布した『学制』は半年ごとに進級試験を行い、さらに小学校の全課程を終了した時点で卒業試験を行うべきことを定めています。また同年同省が出した『学制着手順序』は「生徒階級を踏む極めて厳ならしむ……毫も姑息の進級をせしむべからず」と定め、各府県はこの条文を基にして、総点

のおおむね6〜7割以上の得点をとることを進級の条件とする規則を設けました。この条件を満たせず落第していった生徒も多かったのです。卒業、進級の試験のほかには「月次試験」を行ったり、郡内・県内の生徒に成績を競わせる比較試験(集合試験)を行ったりしました。

また、県令や書記官が成績優秀な生徒に褒賞を授与することを目的とした巡回試験を実施するところもありました。そして、試験の成績で教室の席順を変えたり試験の成績を落第者の名前をも含めて校門の前に掲示したり、父兄に直接通知したりしたのです。このように明治中期まで小学校では試験の成績が重視されたのです。学業面での競争を通して、学習意欲を高めて学力を向上させようとする考え方に文部省や県は立っていたように思われます。

試験による競争の弊害が指摘され、文部省が競争を抑制するようにするのは明治24年から、明治33年に至ってようやく試験によって進級と卒業を認定する制度を廃止しました。『学制』頒布以来約30年間小学校を支えた試験制度と競争の仕組みは改められたのでした。

他の中学校の中途退学者

しかし中学校ではその後も制度は変わっていませんでした。それでは他の中学校はどうだったのでしょうか。土浦中学の分校から出た発した県立龍ヶ崎中学校では、明治32年から41年までの十年間の入学数の中で、中途退学者は合わせて803名。土浦中学の前記資料の十年間の退学者は合わせて859名。同じ時期の群馬県立前橋中学校の中途退学者の割合は58%、三重県立上野中学校は59%です。全国的な統計による平均は57%になっています。したがって、どの中学校も同じくらいの割合で中途退学者を出していたことが分かります。

中途退学の原因

この原因を考える上で念頭に置かねければならないのは、当時は入学イコール卒業の考え方は強くなかったことです。各学年修了者には「学年修業証書」が授与され、二、三年生んで社会に出ていく例もありました。

全国的な統計では経済的理由に因る中途退学者は、明治37年から42年までの6年間で11%前後であり、そう多くはありません。

前橋中学校の同時期の資料によると、退学者数に占める「落第のための退学」者の割合は40%前後となっています。落第しつつも卒業した者の割合が9%ですから、落第が中途退学の主な原因であったことが分かります。このことは、土浦中学についてもあてはまると考えられ、いくつかの統計からも全国のどの中学校についても言えるように思います。

厳しい学業と土中生の矜持

明治34年の『中学校令施行規則』では平素の学業と並んで試験を「修了と卒業の必須条件」にすべきことと定めていました。年2回の学期試験と学年末の学年試験が最重要視され続けました。試験の成績が基準に達しない者は進級できなかったのです。そして土浦中学校ではその成績は、他の中学校と同様に、上質紙の小冊子『学年試業成績表』(全生徒を学年別に成績順に並べ、一人ひとりの各教科の評点、合計点、及落、氏名等を記したものにまとめられ、生徒を通して保護者に届けられたのでした。また、小学校では廃止された成績によって教室における座席の順序を決めるやりかたも続けられました。

このような学業に対する厳しさの中で、明治後半期の土浦中学の生徒達は、その現実を大きな槌(てこ)として勉学に励んでいたのです。それが土中生の面目であり、矜持にもなっていたのだと思います。そしてこの心意気は、現在の土浦一高生の学業に対する真摯な姿勢として受け継がれていると考えてよいのではないのでしょうか。



↑ 軍事教練（昭和初期・於上大津村手野小学校）

発火演習？

明治中期、中学校の重要な行事の一つに「発火演習」があった。発火とは銃に実弾を入れず、火薬だけを詰めて撃つことである。つまりカラダマ射撃である。撃つたとき薄い煙がパツと立ち、ズドンズドンという大きな音が鳴り響く。発火演習は実戦の状況を設定して発火を行った軍事訓練の初歩的なものであった。使った銃は村田銃（旧本館資料展示室に展示されている）である。この銃は剣や背囊とともに雨天体操場裏手の武器庫に大切に整然と保管されていた。『進修』第3号によれば、第一回発火演習は明治33（1900）年1月12日に木田余で行われた。その後、年2回程度行われるようになるが、演習場は近辺の木田余、高津や遠くは谷田部、石岡方面などであった。日露開戦前年の明治36年2月7・8日に行われた発火演習は大規模なもので、その様子は『進修』第5号（37年2月）の「広岡原附近発火演習記事」（第3回生高須四郎（後の海軍大将）に詳しく記録されている）

再現「広岡原附近発火演習」

4・5年生を1個小隊の南軍と3個小隊の北軍に分け、体育科教師が南北両中隊の指揮官となる。指揮官は演習を統括、監督する統監部の命令に従うことが事前に決められていた。

南軍は7時に、北軍は8時に学校を出発。南軍は土浦での戦鬪に敗れ水海道に向って退却、北軍は南軍を迎撃するため水海道に向って進軍することを想定。警戒行軍をとりながら上高津西南方高地に到達。南軍はその高地に散開し、また後方の林の端に陣地を構えていた。9時35分南軍は北軍を認めて発射。北軍は南軍陣地に向って進撃。両者の距離300m。戦鬪開始。段々たる（響き渡る）銃声は天地を動かし、叱咤の声は木魂に響きて其壯観といふ計なり。10時南軍は戦況不利に陥り退却。10時25分、上



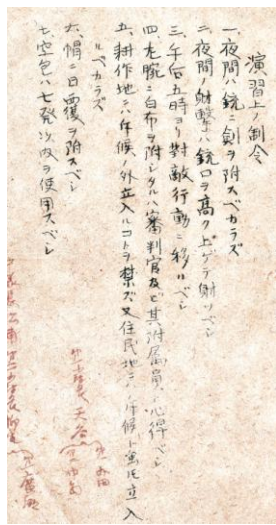
若き日の高須四郎氏 →

広岡北端の林に沿って散開、防御の態勢をとったが、北軍の攻撃を受けてまた退却。そして上高津南方の長い隘路を隔てた林を陣地とした。しかし何の計略あつてか、南軍はこの要害を捨てて退却。11時25分北軍は南軍のゆくえをつかめず、演習を中止、昼食とする。南軍は道に迷い統監部から離れた所であり、命令は届かなかつた。1時5分演習再開。北軍は防御の態勢をとりつつ行軍。3時40分館野に到着し、目的を達成。谷田部に南軍とともに宿泊。

《武勇の気魄》ここにあり

発火演習は前記の演習2日目のように天候に恵まれない時もあった。前年の35年3月1・2日に石岡地方で行われた第5・4・3・2学年合同発火演習の時も雨であった。霏々たる雨、寒気颯として、泥濘を踏んでのような悪天候の中での演習。この記事を書いた生徒は、勇壮にまた活発に、困苦に耐え欠乏に屈せざる……吾人の快とす

発火演習の注意事項を示した文書



る所なり、實に壯雄且激烈なる演習をなせしは、實に吾人の一快事たるなり」と結んでいる。生徒を代表してのこれらの言葉は、困難なことをやり遂げた充実感や誇らしい気持ちを表しているが、また生徒たちが演習の目的を理解し《武勇の気魄》をもって真剣に取り組んだことを暗に語っているように思える。

「発火演習」の時代的背景

発火演習は明治期の他の学校行事と関連づけることで、その重要性を知ることができる。遠足は一種の行軍であった。修学旅行も汽車を利用したのは都市間の移動の時だけで、目的地及びその周辺ではこれまた長距離を歩くという行軍が行われた。

また中学校でも行われていた四方拝（元旦の宮中行事で、天皇が天地四方の神に五穀豊穰・天下泰平を祈る儀式）や紀元節の式典では、生徒達による一斉射撃や分列行進などが催された。例えば明治35年1月1日の四方拝では、式後に4・5年生による一斉射撃が行われた。その様子は「轟然又轟然、耳を聳する許りなりき」（『進修』第4号）とある。同年2月11日の紀元節では式後、4・5年生徒の中隊による教練が実施された。その様子は「立派に武装した凡百の小兵士、縦隊に横隊に、喇叭と共にしつしつと運動せる面白さ、勇ましさ、思はず手をあげて喝采したり」（『進修』第4号）と述べられている。

この時代の学校行事の多くは、教練の内容を含んでいたものであり、このような状況の中で行われた発火演習であった。生徒達は自分たちが、国家に期待されていることを十分に承知して、その期待に沿うように努力していたのである。

大正14（1925）年に「陸軍現役将校学校配属令」が公布され、軍事教練は年を追うごとに本格化していき、日中戦争、太平洋戦争の軍国色の濃い時代へとつながっていくのであるが、明治期にはその軍靴の暗い響きはまた無かつた。



日本館校舎西側

明治時代、文明開化の波にのって、建築の分野でも、西洋の材料・工法が取り入れられました。本校の日本館校舎を設計した駒杵勤治技師は、正統的な洋風建築として、屋根葺き材に「瓦」でなく「天然スレート」を採用しました。今は聞き慣れない「天然スレート」の屋根とは、どのようなものだったのでしょうか。

《天然スレートとは》

一般にスレートと言うと、木造住宅の屋根に使われる「スレート瓦」、工場や倉庫の屋根・外壁に使われる「波形スレート」などを指します。セメントを主原料とした成型品です。日本館校舎の現在の屋根葺き材も同種類のもので、製造段階で表面に着色してあるため、「化粧スレート」と呼ばれます。

一方、英語で「slate」とは、屋根葺き材としての石の板を指します。先に述べた方は、いわば「人造スレート」であり、それと区別するため、本来は単に「スレート」であったものが「天然スレート」と呼ばれるようになったのです。ただし、それらの人造スレートは、天然スレートの建材としての「用途」の代替えとなつていたのであって、材質を同じに作り出したものではありません。

工作機械の発達してない時代を思えば、人間の腕力で板に加工できる石があるでしょうか。堆積岩に属する「粘板岩」が該当し、単に柔らかいではなく、ある一定の方向から衝撃を与えると、層に沿って板状に割れる特性を持ち、世界各地で産出され、利用されています。考古学で「石包丁」と呼ばれるナイフ型の石器や、紙のノットが普及する前に学校で字の練習に使われた「石盤」も粘板岩から作られました。

国内では、宮城県石巻市雄勝地区で採れる「雄勝石（おがついし）」があります。硯の原石として有名で、古い歴史を持ちますが、屋根葺き材としての利用は明治になってからです。宮城県登米市でも、ほぼ同質の「とよま玄昌石」として採掘されていましたが、平成6年に休止になりました。

採掘は、山の中腹に露出したところから、大きな塊として切り出し、層に沿って割っていきます。鋸で丸太を切るように切り込むことはなく、ある程度小さくなれば、手持ちの工具で加工できます。

色は、青みがかった黒、つまり硯の色です。漏れると艶のある黒、乾くと青みが強く見えます。日本館校舎の昔の白黒写真では意外と白っぽく写っているものもあります。

なお、茨城県大子町でも小規模ですが採掘され、「国寿石大子硯」として販売されています。

《天然スレートの屋根》

長所は、材料としての耐久性が高いこと、吸水率が低いことです。寒冷地では、表面から水が浸み込んで凍ると材質が劣化するため、有利です。また、施工は比較的簡単で、勾配の急な屋根、垂直の外壁にも使えます。

短所は、材料の入手・施工業者が限定されるため、産地近郊以外では割高になること、勾配の緩い屋根には雨漏りしやすくなるので向かないことです。

ヨーロッパ各地では、古くから屋根葺き材として使われてきました。おとぎ話「シンデレラ」の中に出てくるようなお城、天を衝く尖塔を誇る大聖堂、中世の雰囲気をも今に伝える街並み、ちよろど私達が瓦屋根を見るのと同じように、ごく普通のものです。

洋の東西を問わず、物流が現在とまったく違う昔は、その地域で入手しやすい材料を建材として活用し、独自の技術を培ってきたのです。栃木県宇都宮市近郊の旧家には、大谷石の蔵があるのもそういうことです。

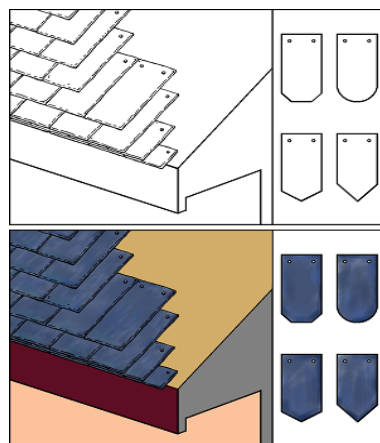
明治時代初期には、洋風建築でも見様見真似で建てられたものもありました。木造部分は洋風でも屋根は瓦の場合もありました。駒杵技師は、大学で学んだことに基づき、屋根葺き材にも西洋の建築と同じものを使えば、ということとで天然スレートを採用したのです。正面玄関の尖塔部分は勾配が急なことと理由のひとつと想われます。

日本館校舎及び同時に建てられて現存しない普通教室棟・特別教室棟・雨天体操場は、天然スレートの屋根でした。雄勝産又は登米産と思われまます。日本館校舎は、昭和41年に淡緑の化粧スレートに、平成5・6年には黒の化粧スレートで葺き替えられました。

《天然スレートの現在と今後》

明治・大正時代の文化財建造物にはかなり使われています。赤煉瓦の東京駅は、現在復元工事中ですが、屋根の天然スレートは、一旦全て外して、できるだけ再使用されるようです。近隣の実例として、千葉県印旛郡栄町「千葉県立房総のむら」の「旧学習院初等科正堂」があります。平屋なので、よく観察できます。石巻市・登米市近辺では一般の住宅でも使用されていま

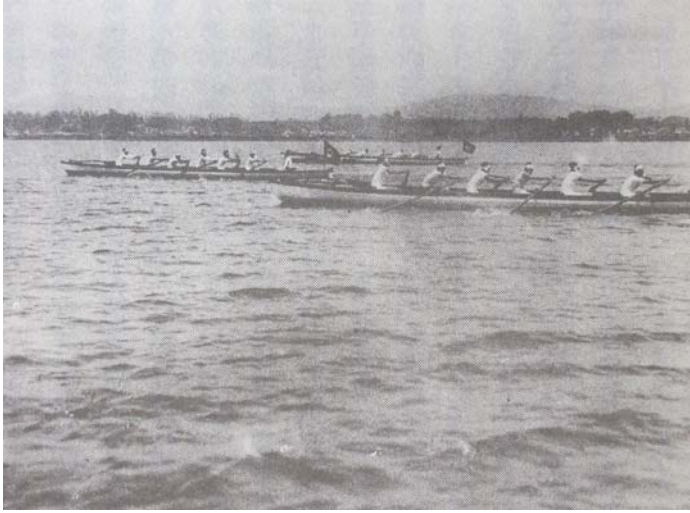
す。同じ明治時代に始まった、赤煉瓦造り・石造り建築が、耐震性に難があるため新築は認められないのに対し、天然スレートには法律上の問題は無いので、輸入品も含めて高級住宅などには今後も使われていくでしょう。屋根以外では、住宅の玄関廻り、周囲の敷石・飛び石、浴室の床といった用途もあります。



スレートの施工方法

《施工の方法》

右の略図をご覧ください。1尺1寸5分×6寸（約35cm×18cm）の長方形、厚みは5mmから8mmくらいに加工します。短手の一辺に釘穴を2個あけておきます。屋根の流れ方向に縦長に置き、釘で留めます。横には重ねません。そこに入る雨水を流すため、縦には大きく重ねて葺き上げていきます。長方形以外の形状もあり、神戸の異人館「うろこの家」では、右上の形状で外壁にびっしり取り付けてあります。屋根の断面を三角形とすると上の頂点を棟（むね）といいます。天然スレートは板状以外には加工しにくいので、ここは工夫が必要です。日本館校舎では、断面が鉄道のレールに似た形状又は棒状の、木製の芯材を据え、トタン板で覆い、その裾を天然スレートにかぶせてあります。現在でもその部分は同じです。



ボートレース（昭和2年）ゴールをめざして

今夏の甲子園大会の初出場校に、富山県立南砺総合高校福野の名を見つけ、同校にエールを送りました。同校の前身は富山県立農学校で、その草創期の校舎は本校旧日本館と同じく重文の指定を受け、「巖浄閣」として保存・活用されています。そのことはAcanthus第9号で紹介しました。同校の生徒諸君も創立以来の伝統を矜持に、活躍しているようですね。ところで皆さんは、本校の旧日本館を訪ねたことがありますか。展示室では、様々な分野で全国に名を馳せた先輩達の栄光の数々を目の当たりにすることができます。それらの中に、昭和45年インターハイ女子S級で、友部美恵子・宮崎敦子（高23回）が初の全国制覇を成し遂げた時以来のヨット部の輝かしい足跡もあります。同部の創設には、土浦中学校端艇部OBが深く関わっています。

今回はヨット部創設のきっかけになった土浦中学校端艇部について書きます。

♪ われは湖の子 霞ヶ浦を 駆け抜けた土中生の青春

『われは湖の子さすらいの……』、琵琶湖周航の歌（旧制三高寮歌）が、霞ヶ浦でしばしば聞かれた。歌うのは、「ボートに青春を懸ける土中生」である。夏休みともなれば、潮来・鹿島・銚子へと遠漕し、特に大正末から昭和初期が花の時代だった。彼らは、尻の痛みものともせず、フィックス式（固定式）七人乗りの端艇（短艇・ボート）で遠漕し、心身の全エネルギーを発散した。正に『オールを握らざるものは、亀城健児にあらず』だったのである。

端艇2・和船2で端艇部出航

端艇部は明治34年進修会の下に創部された。翌年7月、五人乗り端艇と和船を購入、前者に筑波・霞、和船に西施・亀城と命名した。37年6月、初の競漕会が行われた。和船競漕の後、五回に及ぶ学年対抗の端艇競漕が行われ、ここに土浦・真鍋両町や近隣の人々の関心の的となる一大イベント『水上運動会』の幕が開けたのである。この記念すべき第一回競漕会は、4年生（2回生）が優勝した。

創立十周年記念端艇建造事業

明治40年、創立十周年記念事業の一環として、進修会会長幸津国太郎（校長は新艇の建造を企画、父兄懇話会に提案し、賛同を得た。更に土浦・真鍋両町を始め広く地域の有志にも働きかけ、土浦中学校創立十周年記念端艇建造発起人会の設立に漕ぎつけ、首尾よく七人乗り新造艇三隻・中古艇二隻を購入した。

記念式典は、40年12月1日、来賓三五〇余名の列席の下、挙行された。式後、午後零時半から『海国男子』の額が掲げられた艇庫前で新艇五隻の進水式を行い、それぞれ鹿島・香取・筑波・桜・霞と命名した。続いて、新艇による初の競漕が、学年毎に5回行われた。これを機に生徒のボート熱は一気に燃え上がりを見せた。一方では、早くも近隣の人々の注目の的となり始めた。翌年には、艇



ボート部艇庫と部員（明治44年）

庫付近は、大勢の観客で埋まった。この年の水上運動会は来賓や生徒用に三隻、審判係用に一隻の汽船を雇って開かれた。生徒達は学年・学年間計7回の激しい対抗レースを繰り返した。加えて、水戸中学の選手や来賓・卒業生・職員混合競漕も行われ、盛況の裡に幕を閉じた。

ボートレースの過熱とトラブル

やがて、艇は部員以外の一般生徒にも開放されたから、部の活躍に留まらず校内のボート熱は更に高まり、特に学年対抗レースは圧巻で、対岸の応援歌と太鼓の響きがいやが上にも湖上の選手を奮い立たせた。レースへの生徒の過熱は、勝敗によっては、上級・下級生間でトラブルを起こしたりした。それを慮った審判が敢えて上級生に有利な公正を欠く判定を下すことすらあった。明治44年のレースでは、四年生が五年生に二分の一挺身差でゴールしたが、五年生の優勝と判定した。当然、四年生は憤懣やるかたなく、高田保（中12回）が中心になって抗議し、全校生徒大会にまで発展した。こうしたトラブルが重なってしばしば大会が、実施されないこともあった。

九月一日の悲歎 新艇到着せず

こうした事態の中でもオールを握りたい生徒達の熱意に応え、新艇三隻を建造することにした。艇名も定め、8月31日の到着を心待ちにしていたが、その日、新艇は川口にその姿を見せなかった。しかも翌9月1日、突如襲った大地震は、学校中を不安に陥れた。心配は的中、地震騒動が一段落しても三艇の行方は杳として掴めなかった。半ば諦めながらも、安着の望みは、捨てなかった。その甲斐あつてか、一カ月後、10月27日、突如汽車便で新艇三隻が届いたのだ。学校は歓喜に包まれた。ほぼ一カ月練習に励み、11月24日、上大津村の弁財天付近で久しぶりのボートレースが喜びの裡に開催された。

端艇部廃部とプール建設

川口川付近の整備が計画され、昭和10年土浦港の築港と護岸工事が行われた。太鼓橋の架設に伴い、盛り土が120センチほど高くなり、湖岸にあった艇庫からの艇の出入りが難しくなった。色々な工夫を試みたが、端艇部の存続は困難となった。代ってプールの建設案が浮上した。水泳部は、進修会の傘下になかったが、力をつけていた。霞ヶ浦での練習は、ワイルド氏の危険に晒され、プールの建設が望まれていた。遂に、進修会は、端艇・艇庫の売却代金と端艇部の基金を基にプールの建設を決議した。こうして土浦中学校端艇部の歴史は閉じたのである。代って県下でも稀有な25mプールが誕生した。

懐かしいボート漕ぎは、重労働

土中25・26回卒業の端艇部有志が、昭和28年艇友会を結成し、再びボートを浮かべることになった。しかし、既に四十路を越えていた先輩達は、『この年で、ボートを漕ぐのも重労働だな』のボヤキと共に、『海軍払い下げのカッターに帆をかけて走った』ことを思い出し、思いは急速にヨットへの乗り換えに傾斜し、会の名も霞ヶ浦ヨットクラブと改称した。このクラブに団体で使ったヨットが払い下げられた。クラブは、このヨットの寄贈を母校に申し出た。これをきっかけに土浦一高のヨット部が誕生したのである。

平成21年11月24日

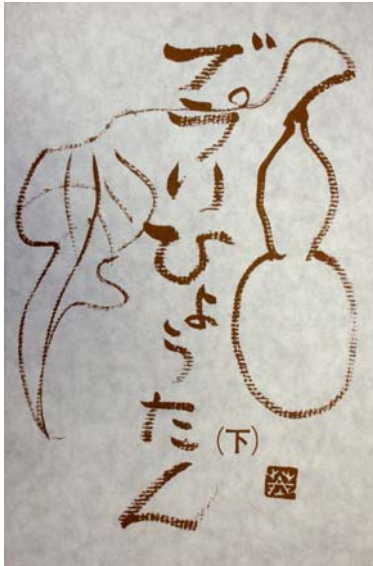
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会



「ブラリひょうたん」執筆当時の高田 保

前号に高田保の名が見えたが、高田の活躍当時とは大きく時代が隔たった皆さんにはその名も卒業生Aと言うに等しかったのではなかろうか。本校は創立以来今日まで様々な分野に数多くの人材を送り出してきたが、文学において、高田保は本校最右翼のOBといつてよい存在である。ちなみに『20世紀日本人名事典』を繰ってみると、その冒頭は次のように記されている。《高田 保（1895～1952）大正・昭和期の劇作家・演出家・随筆家・小説家・映画監督・俳号羊軒 戦後の昭和23年12月から東京日日新聞に随筆『ブラリひょうたん』を連載、ウィットとユーモアに富んだ社会風刺で喝采を博した。》その賛辞もさることながら、これほど多芸多才な作家も珍しい。今回は高田保について、中学時代の級友下村千秋も若干からめながら、そのあらましにふれてみたい。

「ブラリひょうたん」表紙（題字・表紙原画ともに高田 保） →



ブラリひょうたん

高田 保（中12回）前編

トップ入学、卒業は???

保が旧土浦中を受験したのは明治四十一年四月、発表の様子については下村千秋による当時の回想が残されている。

朝日村（現阿見町）では抜群の成績ながら、難関とされていた土浦中だけに、まったく自信が持てなかつた千秋は「受かるにしても下のほうと、成績順に発表される入格者氏名を最後のほうから見ているが、懸念したとおり見当たらぬ。念のため最上位に目をやると自分の名前が一番目にあつた。驚きながら一番はうと見るとそれが高田保だつた」といふ。農村のそれもさほど豊かとも言えない家庭に育ち、級友から「下村いさん」のあだ名をもらつたほど地味な存在の千秋。一方は千族の出で、土浦の町育ち、弁護士でシエークスピアを原文で読み、俳人でもあつたという伯父を持つ保は、才気煥発、話はずまく面白く、気がつき気がきく人気者。上下級生の別なく交際範囲も広かつた。一年時の「生徒監警簿」指導上の参考として生徒の性格等について記されたものには「機敏ニシテ伶俐、器用親切、人望ハ同級生中第一ナリ」とあるとおり、保は各学年、ともに級長をつとめた。生徒時のエピソードも多いが、一つだけ挙げてみよう。

中学二年時だつた。東洋史の時間に先生が突然今日

日は試験だ」といい出して答案用紙を配り、黒板に大きく「唐時代の内乱について記せ」と問題を書いてきつたと教室から出て行つてしまつた。足音が遠ざかる。すぐには戻りそうもなさそうだとわかると、誰も彼も机の下から教科書やらノートやら取り出して大急ぎで書き取つた。保はそれができないまま、やがて先生が戻り答案は回収された。そして次の時間、先生の結果公表は「みんな善点だぞ！こんな問題を突然に出されて正確に答えられるなんて、カンニングをやつた証拠だ。君たちの根性を試すのにわざと職員室に行つていたので、教科書やノートを見て書いたのは見なぐともわかるとる。その点、一番できていなかった答案の高田が一番立派だ。これに百点をやる」だつた。これに保はすさまじく抗議した。「あれはあくまで歴史の試験で人格の試験ではなかつたはずだ。だからそんな不合理な採点はない。せつかくの百点が返下する」と申し出たのだつた。

さて五年時になると監督簿も少しと趣を異にし「著シク現代カブレシタルフウアリアテ文的な生活ニ憧憬ス」とあり、未来の保の下の形成がうかがえる。保も千秋も成績は下降した。当時は落第があり入学時の百人は七十人に減つていたが、保は十五番にまで下がつた。旧中は五年制なので「二期に一番すつ下がつた」という話になつて伝わるが、これは有名な人につきものの伝説で、そう順序よく下がつたわけでもなさそうだ。低下の主因は「監督簿」が見抜いてたどり、勉強上りも文学のほうに惹かれはじめたことによる。

千秋もこの点奇しくも共通で、早大英文科に進んだ保の後を千秋も事情で一年遅れはするものの追いかけるように同じ科に進む。

銀ブラ十年三千里

東京に出た保は、時代の先端をゆくモダンボーイたるべく足しげく銀座に通つた。「銀ブラ……」という半生を振り返つての前掲のことは彼の銀座への思い入れが詰まつていよう。銀座のその「この女娼ら、タクシーの運転手や街角の靴磨きまでが保には挨拶するほど銀座マンはみんな友達だつた。

もう一つの根拠地が浅草劇場街。当時の浅草はいわゆる「浅草オヘア」全盛期。大震災前の浅草にはオペラや演劇

の常打ち館が軒を連ねて、銀座とはひと味違つた繁華街だつた。当時の保は脚色・演出に才をふるい、白井喬二の「軍士に立つ影」のような主演に十時間を要する大物から一幕物まで、器用に手早くなんでもこなして重宝がられていた。

昭和の大恐慌とルンペン文学

何事にも保に後れをとつていたかに見えた千秋だつたが、文壇で先に名をあげたのは千秋のほうであつた。大空後説新聞社社部記者となるが、ほゞなく退職・創作の道に進む。同期生で発刊した同人誌に発表した「ねぐら」という作品が志賀直哉の目にとまり、この縁で直哉を終生の師と仰ぐことになる。結婚を機に東京市役所に就職するが、大正十一年関東大震災後に退職、作家生活に入る。昭和五年『中央公論』に『天国の記録』を発表、次いで同年末に朝日新聞に連載の『街のルンペン』が大評判となり一躍流行作家となる。前作は私娼の悲惨な生涯を、後のはその日暮りの失業浮浪者のどん底の生活を、いずれもルポルタージュふうで描いたもので、当時の暗い世相とも相まつて話題を呼び、特に『街のルンペン』は当時のトップ女優島崎雪子主演で映画にまでなつた。ルンペンはドイツ語から来たもので「ぼろ（襤褸）の原義から実業者・浮浪者の意に転じた。だが使われたのは千秋のこの小説からで、当時の流行語にもなり、その後類似のテーマの作品が続々生まれるきっかけとなつたことから、千秋はルンペン文学の先駆とされる。

旧本館には、保千秋の様々な資料が展示されている。



羊軒

12月8日は何の日？ 太平洋戦争開戦の日です。それまでの時代の流れを追ってみよう。大正時代(1912~26)にはデモクラシーの風潮が強まり、それと共に一方では社会主義思想も一部には広まった。しかし、一般には忠君愛国の精神や国家主義・軍国主義の風潮が、明治の後半期から固く根を下ろしつつあった。昭和に入ると、軍国主義の動きが強まり、深刻な不況が続く中で軍や右翼の発言が強くなった。昭和6年(1931)満州事変が引き起こされてからは、ファシズムの動きが台頭した。昭和12年には日中戦争が始まり、国は戦時体制に入った。こうしたなか教育界では軍国主義教育、忠君愛国主義教育が徹底して行われたが、今回は土浦中学の軍国主義教育について見てみよう。



射撃訓練で匍匐前進する土中生(昭和5年)

強化拡大される軍事教練

大正14(1925)年、『陸軍現役将校学校配属令』が公布され、中学校にも現役将校直接の指導による軍事教練が必修科目となった。明治時代から行われてきた発火演習の他に、教練が毎週2時間設けられた。そして発火演習は「野外教練」と呼ばれるようになり、その回数も年を追うごとに多くなった。昭和7年までは年3回から8回程度だったものが、8年には12回、翌9年には18回行われた。原則として学年単位で行ったが、時には複数の学年が合同で実施することもあった。

科目の教練や野外教練の内容は、直立不動、挙手敬礼、行軍、木銃を握っての匍匐前進、射撃訓練、銃剣による刺突訓練、斥候、飯ごう炊飯、様々な訓練を総合した部隊訓練などで、まさに軍事訓練そのものであった。

一、二年時は直立不動、挙手敬礼、行軍、匍匐前進、三年時はそれらに加えて射撃訓練が、四、五年時は部隊訓練を中心としたものになった。昭和に入ると、軍隊の演習には、見学ばかりでなく、それに参加するようになった。昭和4年11月の石岡・志筑方面で行われた陸軍大演習には全校生徒が見学に行っていた。昭和6年11月には、谷田部方面で実施された近衛師団の機動演習に、四、五年生213名が、7日午後8時から8日にかけての払暁演習に参加した。この時の土中生たちの行動は統監部に強い印象を与えた。11月10日付の『いはらき新聞』に「統監部を感服した土中生の活躍」の見出しで、その様子を掲載している。

兵営宿泊訓練実施

昭和の初めころから水戸歩兵第二連隊の中で、二泊三日の兵営宿泊訓練も実施するようになった。毎年10月に行われ、昭和11年まで続いたが、これには四年生全員が参加した。昭和6年4月に発行された『進修』第33号には、これに参加した生徒達の感想文が多数載

せられている。そのなかで、生徒達は特に次の三つのことに驚いている。一つは、兵営において、上官の命令が絶対であり、礼儀や、秩序を重んじる軍紀が厳正であったこと。二つは、隊員の動きの機敏さであった。たとえば、機関銃隊訓練では、指揮官の命令一つで馬の背に載せてある機関銃の部品を降ろし、組み立て、いつでも発射できるように並べ、また分解して馬の背に載せるというその操作の迅速性にびっくりしている。三つ目は、実弾射撃を初めて経験したことである。

連合演習 開始

連合演習は県下の全中等学校生を集めて行う演習で、昭和13年から実施された。13年11月4日から翌日にかけて行われた筑波山麓での最初の連合演習には、土浦中学校の五年生全員が参加した。この演習は、12日を短時間での強行軍、月明かりの中を行軍しての夜襲。寒さに震えて眠れなかった農業倉庫宿泊など苛酷なものであった。翌14年9月には、栃木県金丸ヶ原において二泊三日の連合演習が、中学生三千名を集めて行われた。16年11月、筑波山麓での連合演習には七千名が動員されたという大規模なものであった。

兵営宿泊訓練・連合演習を体験して

兵営宿泊訓練や連合演習を体験して、生徒たちはどのような思いを抱いたのであろうか。昭和5年行われた兵営宿泊訓練に参加した四年生の感想文には、どれも軍人・軍隊に対する尊敬の念、臣民としての自覚が述べられている。生徒の一人鶴町朝次は「……命を惜しまず、出征の途に上がるあの勇敢な軍人に対し、責任と地位をわらわぬまじくして奉仕せねばならぬことを自覚した。第三は……大日本帝国の臣民として人間的なことを期す次第である」とその思いを述べている。このように兵営宿泊訓練は、生徒たちの帝国臣民としての自覚と責任を深める絶好の行事となった。しかし、また何人かの生徒は夕食後、酒保(軍



査閲官を迎える土中生

隊の中の売店)で買った菓子や果物を食べたりしたことなど、兵営宿泊訓練はまた楽しい行事でもあったのである。

連合演習についてはどうであったか。最初の演習に参加した五年生の保立和男は、「嗚呼！ 今にして思ひ起す所の連合演習は『なん』と云ふ語に『なん』……『軍への感謝』と『精神力の偉大』自分々々の演習の戦禍の中に於て最も痛切に感じたのはこれである。今軍は支那において……身命を賭して努力してゐることを思ふ時、我等の胸は実に感謝の感で一杯になるのである。……又自分々はあの戦禍の中に『精神力の偉大』を体験した。あのころを通じて一名の落伍者もなげ無事演習を終つたのは実に精神力に『なん』と云ふのであつて……」多くの生徒が抱いた思いはこのようなものではなかったか。

査閲：学校の最大行事

軍国主義教育の中で大きな役割を果たしたものが査閲である。『陸軍現役将校学校配属令』は、陸軍大臣は将校を配属した学校に現役将校を派遣して教練実施の状況を査閲させることができると定めていた。査閲はこのために従つて年一回実施され、軍から派遣された査閲官が来校し、実際の教練を見て評価を下した。土浦中学の場合、査閲官は水戸歩兵第二連隊長かその代理者であった。その評価は生徒の陸士や海兵の可否をも左右するほどの大きな影響力を持っていたので、配属将校をはじめ学校中が全神経を使って熱心に取り組んだのである。

A c a n t h u s

第20号『ブラリひょうたん』高田保 後篇

平成22年1月26日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
日本館活用委員会

保は大学進学当初、中学・大学とも先輩で従兄の山口剛(中1回)のもとから通った。山口は当時早大高等師範部講師で、のち早大教授。江戸文学研究の基礎を築いたとされ、中国文学書の翻訳での評価も高い。のちに『ブラリひょうたん』にちりばめられる保の和漢の知識の源は、従兄の家での日々にもあったのかもしれない。大正6年卒業。その秋最初の咯血。子規らを苦しめた肺結核が保にもとりついたのであった。

←「ブラリひょうたん」執筆ときに描いた自画像



高田保はパリ通

映画雑誌会社勤めを経て、生活の場は浅草に。大正7年以降11年に至る間、僕は全く飄々として風来の徒となった。就中9年前後の二年間は、僕は浅草公園に暮らした。人生落伍浮浪の徒は親しき友となった。この間衣食した所は金龍館即ち浅草歌劇の世界である。」とは、『人魂黄表紙』自序にある保の回想である。

大正11年公園劇場などを経営する根岸興行の文芸部に在籍、脚色家・演出家としての才能を開花させる。この前後、興行社の娘むめ(梅)と同棲。大正12年の関東大震災は劇場街をも焼け野原にするが、その二画のむめが所有していた焼跡地に買い手がつき、むめに思わぬ大金が入る話が舞い込む。本場パリでの演劇修業は保の年来の夢であった。パリが舞台のフランスの戯曲や小説を片端から読みあさり、パリの広場や橋の名、静かなモンパルナスやカルチエラタンのカフェ、庶民的なモンマルトルの居酒屋の名も知っていた。そしてどこそここの街角には噴水があり、その横にポストがあることまで覚えてしまった。大宅壮一が保と一緒にパリが舞台のフランス映画を見たとき画面を見ながら保がこれは何通りで角から何軒目にどんな店があるかということまで説明するので、パリに行っていた人よりよっぽど詳しいと大宅は呆れたという。

保のパリ留学は、彼を一人前の劇作家に育てたいむめの願いでもあった。渡仏などは夢のまた夢という時代、近づく正夢に保が浮かれるのも無理はない。会う友ごとに渡仏の話をつづたうわさは土浦にも聞こえ、中学同窓中心に保を招いて盛大な壮行会が催され、饒別も集まった。しかし事態はここから暗転する。むめの実家が温泉のボーリングに手を出して失敗、多額の負債を抱え込み、むめに回すはずの入金はその穴埋めに消えた。保がこの時ほど落ち込んだことはなかったろう。饒別までくれた旧友にも会わせる顔がない。この件以降保の土浦に向く足

は遠のく。

旧島崎藤村邸での晩年

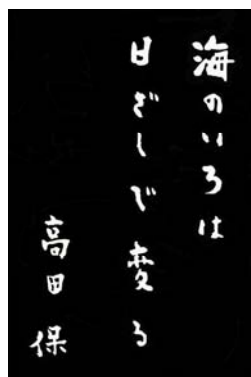
戦前戦中にも保の話題は少なくないが、紙幅の都合で話を先に進める。

昭和18年、病勢の進行から転地療養の意味もあつて知人のついで大磯に移住、その後二度目の転居で旧藤村邸に入る。大磯でも保の人なつこい性格からその住まいは夜な夜な様々な町民のサロンと化した。作家保に寄るのではなく人間保に集まったのである。23年12月、保の文名を決定づけることになるコラムの新聞連載が始まる。保は戦前、左翼シンパとして拘留された経歴を持つが、コラムの表題『ブラリひょうたん』を自ら説明して、「元来私は右でも左でもない。ブラリとはつまり宙に浮いていることである。ひょうたんはブラリから来たツケタシの言葉で別に意味はない」としている。その鋭い社会批評は、洋の東西・時代の古今にわたる博識が紡ぎだす挿話の興も加わり評判を呼んだ。

一例を挙げると、「非武装自衛」といった固い話でも、その折の季節にちなんだ内裏様の向き様から入り左甚五郎の話へ、そして梅原龍三郎からインドのネール首相に転じ、旅の伶人が海賊に襲われる古今著聞集の話へと続き、読む者を引きつけ飽きさせない。広津和郎の「旅の帰途偶然手にした新聞で初めて高田保のコラムを読んで驚いた。面白い、いや単に面白いでは足りない。才気も深みもある。帰宅するとすぐ家人に明日からこの新聞を配達させるよう指示した。」という話が世評を物語っている。

結核の特効薬ストレプトマイシンも保にとっては時すでに遅く、一時的小康をもたらしたに過ぎなかった。『ブラリひょうたん』五百二十八章を遺し、昭和27年2月20日永眠。享年五十七歳。大磯での葬儀には文学界・新聞関係に加え、当代第一線の舞台俳優が居並んだ。遺骨は土浦の高田家菩提寺に葬られたが、大磯町は高田家に分骨を乞い、保が愛した大磯の海が

保の描いた大磯の風景画
と小公園の記念碑碑文



見渡せる丘に葬り、町民も集つ小公園とした。記念碑には保の好きなことば、海のいろは日ざして変る」が刻された。町生まれでもない作家が町からこのように遇される例も稀である。死後出版された『ブラリひょうたん』はベストセラーとなった。昭和31年には、保の生家に近い亀城公園にも文学碑が設けられた。碑面には、羊軒の号で俳句もよくした保の「あの花もこの花もみなはるのかぜ」が『ブラリ』連載のおぜん立てをした阿部真之助の揮毫により刻されている。

代表作『ブラリひょうたん』をはじめ保に関する資料は旧本館に数多く展示してあります。ご来館ください。

A c a n t h u s

第21号

平成22年2月16日
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会



旧開智学校

同窓会旧本館活用委員会の事業であります、県外文化財建物視察に、昨年7月、同窓会本部役員・旧本館活用委員会委員17名で、長野方面を視察してきました。見学した3件に本校旧本館校舎を加えて、洋風建築のうち「木造の公共建築」の流れを追ってみます。

旧開智学校 松本市

明治時代の初期、各分野の技術導入にともない、必要な建造物が外国人技術者の指導により建てられ、明治5年に開通した鉄道の新橋・横浜駅舎、富岡製糸工場なども関連、それらは、多くの日本人の知的好奇心を揺さぶったことでしょう。とはいえ、西洋建築の構造・意匠を日本語で解説した本……があつたとは思えません。既存の建物を真似ることから始まったはずです。輸入品の絵画・写真なども入手できれば参考にしたことでしょうか。このようにして日本人の建てたものは、「擬洋風建築」という呼び方で区別される場合がありますが、後年のものと比較して価値が一段低いわけではありません。明治の先人の意欲と努力の結晶として後世に伝えるべきものです。旧開智学校を建てた地元の大工棟梁(立石清重)は、東京の西洋風建築を見学に出向き、スケッチに描いて設計の参考にしました。その時の、手の平くらいの和紙を綴じて毛筆で描いたスケッチ帳が、旧開智学校内に展示されています。(明治9年建築)

旧土浦中学校本館

見様見真似でスタートはしたものの、それでは飽き足らず正当な技法を学ぶために、明治10年、英国人建築家ジョサイア・コンドル(Josiah Conder)年9月28日ロンドン生まれ、1920年東京で逝去(67歳)を工部大学校教授として招聘しました。現在の東京大学工学部です。その教え子で、後任教授となった辰野金吾に、本校旧本館校舎を設計した駒杵勤治技師は、師事したのです。本校旧本館校舎は、ゴシック様式と解説されていますが、偶然そう見えるのではありません。数ある様式の中からゴシック様式を選び、他の様式を混入させないよう意識して設計されているのです。模倣するだけなら簡単では？というのは、情報の海で溺れかかっている現代人の感覚ではないでしょうか。駒杵勤治技師の卒業設計図書が、現在も東京大学で保管されています。石造邸宅の設計図・仕様書とも、全て英語で書かれています。(明治37年建築)

旧制松本高校 松本市

明治の末から大正時代、洋風建築の細部意匠は、日本人好みのものが生き残っています。鎌倉時代、仏教建築の様式として「唐様(禪宗様)」と「天竺様(大仏様)」が伝来しました。「唐様」が、従来の「和様」と混じり合いながら広く普及したのに対し、「天竺様」は後が続かなかつたのちよつと似ています。西洋での「アーチ」は、石造りでは構造上必須ですが、木造では外観だけなので少なくなっています。公共建築では予算の制約もあるため、実用性を重視する方向に進むのも重なり、和風に回帰するのとも違う、独特な雰囲気生まれます。後に信州大学文学部となり、キャンパス移転のため取り壊される予定でした。しかし、保存を望む多くの市民の熱意により「松本市あがたの森文化会館」となり、図書館、大小の催事、サークル活動の場として活用されています。(本館大正9年、講堂大正11年建築)



旧制松本高校本館校舎

信州大学繊維学部講堂 上田市

欧米では、古くからの様式を尊重する一方で、19世紀末頃から新しい様式も模索されます。この講堂は、「セセッション」という直線主体の様式を早速取り入れています。「オール・ヌーヴォ

ー」という曲線主体の様式もあり、現代の家具などにも継承されています。外部は比較的簡素な対照に、内部は木地ニス仕上げの荘重な雰囲気です。完成時点では、「上田蚕糸専門学校」だったため、養蚕に関連するものを内部の装飾モチーフにしています。建築に限らず、文化財としての価値判断の基準のひとつに、その時代の特徴をよく表しているかどうか、ということがあります。その意味で、今後、注目される建物と思われれます。(昭和4年建築)



信州大学繊維学部講堂天井「蚕糸のシンボル蛾」

歴史に「もしも」は禁句ですが

大正12年9月1日の関東震災の教訓から、耐震・耐火性にすぐれ、高層化の容易な鉄筋コンクリート造りが、大規模な公共建築では主流になっていきます。さらに、鉄骨造りの普及や製造法の進化したガラスの応用により、従来からの様式にこだわらない構造・意匠が世界中で流行します。日本の建築家も世界の建築家と同じ土俵で競い合える時代になったのです。また、日本人の日常生活にさまざまな洋風が溶け込み、洋風建築という区分は意味が薄れていきます。駒杵勤治技師は、大正8年に42歳で逝去されました。もしも、長命であれば、さらなる新しい時代の要請に応えた建築作品を創り出していたでしょう。



尾崎校長



小田原教頭

3月と4月は別れと出会いの季節です。その邂逅が互いを固い絆で結ぶことがあります。今回はJリーグのジュビロ磐田のホームタウン磐田市に大正11年創立された静岡県立見付中学校(現、静岡県立磐田南高校)の創立と発展に関わった三人の教育者について紹介しましょう。なぜ今更、大昔の静岡県の見付中学校なのか!三人とも我が土浦中学校で出会い、深い縁で結ばれたからです。その三人とは遣澤校長、国語・漢文科の小田原勇教諭、同じく国語・漢文科主任の尾崎楠馬(クスマ)教諭です。本稿の主役は、同窓生は勿論、在校生諸君も誇らかに歌う♪沃野一望教百里・・・♪の作曲者である尾崎先生と盟友小田原勇先生です

三人の摩訶不思議な邂逅

遣澤校長は、東京高等師範卒業後、兵庫・群馬・岐阜・大阪等の中学校教諭を経、初代龍ヶ崎中学校校長を拝命。教育の眼目は生徒への愛情にあるとし、劣等・不行状・粗暴等の生徒への愛情を強調し、授業は知識を与えるよりも教科目に興味を起させ、自ら研究する態度を培うこととあるとした。知識一辺倒の教育の弊害を予測し、生徒と遠足を能くする等、生徒と共に行動する教育方針、師弟同行を以て実践した。明治37年9月土浦中学校長として赴任。直ちに矢継早に改革に着手した。その第一号に運動会の改革も含まれていた。しかし、皮肉にもその運動会での生徒の余興、ヒョットコ事件の責を負って、改革半ばにして39年11月職を辞した。遣澤校長の理念は、小田原・尾崎の全人教育の思想の基となった。

小田原教諭は、明治39年11月早稲田大学を卒業、遣澤校長により、同年10月国漢科教諭に採用され、41年1月までの16か月在職した。赴任するや、伝馬船二隻のみの水上部部長を命じられた。小田原は、「天恵の霞ヶ浦を持ちながら何等の不見識何等の意気地なしと騒ぎ立て散々手古摺らせた上、ついに短艇新造三隻、中古練習艇二隻を購入することに成功した(創立十周年事業の一環でもあった)」

尾崎教諭は、明治39年東京高師在学中遣澤校長に白羽の矢を立てられ、学校改革の布石にと、国漢科教諭に採用、同科主任に抜擢が予定された。尾崎は、採用され国漢科主任を命じられたが、遣澤校長は既に辞職し、土浦中学校で教育活動を共にすることはなかった。しかし、同窓同郷出身の遣澤との知己を得たことは、後年公私において幾多の支援を受ける基となった。

尾崎楠馬の生い立ち 土浦中学校まで

尾崎は、明治11年10月1日、高知県安芸郡赤野村76番屋敷で誕生。3歳の時、弟出生のため、母の実家船本家に預けられ、叔父楠吉夫妻に養育された。幼少時は、祖母に育てられた。

5歳3ヶ月(明治17年7歳)で安芸小学校に入學したが、教師だった叔父の転勤に伴い、転校が続いた。明治29年(19歳)高知県師範学校入學、33年卒業。安芸郡芸陽小学校訓導を拝命し、教職の道を歩み始めた。同年6月入営。34年退役し、高知県立第一中学校助教諭心得兼務



ボート部艇庫と部員(明治44年)
小田原先生の尽力の成果

分校勤務を命じられた。明治三十六年高等師範学校入學、四〇年(三〇歳)国語漢文部を卒業した。

水泳・端艇・校歌作曲・楽隊指揮

明治40年4月5日、茨城県立土浦中学校教諭を拝命、着任と同時に国漢科主任と舎監兼務を命じられた。高師では、端艇の選手としても活躍、テニスも堂に入ったものであった。音楽にも堪能でオルガンを巧みに弾き、唱歌を好んで歌った。彼の楽才や水泳(21歳で水泳術練習50町渡終了)・端艇の技能は生徒達の為に惜しげもなく同時多発的に発揮された。

顧問として水泳部を熱心に指導し、例年7月田村弁天下で行われた水泳訓練をも担当した。彼は生徒達とよく鹿島遠漕を行った。42年8月の遠漕では、第1日目北浦の小学校の裁縫室に泊めてもらった。「狭い部屋は暑く、蚤はしきりに刺す、蚊帳は臭気を発し、蚊は隙を見て入り込み、中々寝付けなかった。そのような状況の中、尾崎はオルガンを奏で始めた。生徒たちは一曲一節を聴いているうちに、何時の間にか華胥の国※に導かれた」という。

※黄帝が夢に遊んだという理想的な太平の国、昼寝の意味もある

土浦中学には音楽の授業はなかったが、運動会では、「尾崎楽長の骨折りで、練習の功空しからず、絶えず行進曲を奏し競技者には一段の景気を添え、観客の耳を楽ませた」

明治43年7月、夏休みを前にして、全校生徒に校歌作詞の宿題が出された。応募者は、多くなく、四年生の堀越晋の作品が入選した。

明治44年四方拝の後、選定校歌が発表された。尾崎は、堀越の詞を補筆し、曲をつけた。明治39年、第二回卒業生名越那珂次郎は、進修8号の「会友通信」欄に第二高等学校の生活を紹介する「仙台通信」を寄せ、その中で近來全国の中学校で校歌制定が流行していると述べ、「桜水健児の意気を鼓舞するの校歌を合唱し、進修の気躍々として常南の天を風靡するの痛快なるに如かずと存せられ候」と、母校の校歌誕生を強く訴えた。彼の校歌制定への切なる願いは、数年の歳月を経てやっと叶えられた。

土佐ツボ・尾崎と薩摩ツボ・小田原

尾崎と小田原は、何故か気が合い、切磋琢磨すると共に、互いに尊敬の念で結ばれていた。元榛原中学校長小田原は、盟友尾崎への回想文で、「恐らく土佐ツボと薩摩ツボの一脈相通する何等かの共通点結び付けたものである」という。以下の文の殆どは、その回想に依った尾崎のプロファイルである。彼の尾崎観と言ってもいい。

五分刈り頭に浅黒い顔、姿婆気もなく、気取った所など微塵もなかった。ただ不屈の意志の閃きと時あつて紫電迸る力を深淵の底に秘めた双眸だけが、異色であり、鼻下の黒い美髯のみが異彩を放つていたに過ぎなかった。人に接しては温厚、礼儀正しく、時には諧謔を弄し笑わせたが、一面犀利鋭鋒人の肺腑を抉る毒舌もあつた。曲がったことは、秋毫も呵責しない厳しさがあつた。

「僕は高師受験準備の際『言海』を読破したよ」と事もなげに語った事があつた。それは言海のみでなく、天資の英才に加えて、恐らく根限り力限りの読書研鑽をしたに違いない。富嶽が雲表に聳ゆるは、広大な裾野あつてのこと、其の裾野こそ青年時代の刻苦勉勵の蓄積そのものであつた事は、間違いない事実であろう。

二人は、日曜毎によく登山をやつた。筑波の嶺続きの閑居山に登り、忽然咫尺を弁ぜぬ濃霧に襲われ、一歩も動けず山頂に寂然不動の幾時間を経過した時もあった。湖上に端艇練習の生徒と共に夕焼け雲の薄れゆく西の方に紫と浮かぶ筑波の嶺を仰ぐは日曜に限ったことではなく、放課後の毎日と言つていい位であつた。着任早々、水上部長になった小田原は、端艇の購入を提案し、認められた。東京からの新艇は無事着いたが、練習艇二隻は行方不明になつた。校長の命を受

(裏面に続く)



旧見付中学校正門（大正15年）

小田原先生は、やがて土中生が、「オールを握らざる者は亀城健児に非ず」と自負する程の端艇競漕が隆盛をする素地をつくり、尾崎先生が、更に発展させて、土浦中学を去りました。二人はそれぞれの道を歩んでいました。大正11年見付中学校創設を機に再会し、同校の校長・教頭として真の人間教育をめざして協力し奮闘しました。今でも二人の建学の精神は、「見中魂」と語り継がれ、両先生は、見付中・磐南高の同窓生や在校生・地域の人々の尊敬の的となっています。尾崎先生には、頌徳碑を建て、近年「尾崎先生50年忌法要」を営み、小田原先生にも、防風堤の「小田原山」に顕彰碑を建て、お二人の功績を讃えています。このことを伝え聞いた本校同窓会の間でも話題となり、昨年12月、同窓会役員と卒業生有志数名で磐田南高にお邪魔し、尾崎先生の墓参をさせていただきました。こうして新たな両校の結びつきは、土浦中学でのお二人のご尽力、特に尾崎先生の残された校歌などによって生まれました。この事実を本校生徒にも知って欲しいということで今回このようなメッセージを記しました。（なお、掲載した諸資料は磐田南高校訪問時に頂いたものを使用させていただきました）

尾崎は、浜松師範教頭を経て、大正15年静岡県立見付中学校校長兼教諭に補せられた。小田原は、土浦時代の盟友尾崎から、今度見付中学校の校長になったから、その教頭に來いと、の飛電を突然受け取った。彼は、「その任にあらず堅くお断りする」と返電した。しかし、尾崎も粘った。事務的才幹は皆無、かかる位置につくは迷惑の上なしと言う小田原に、事務なんかのために來いと言っているのではないと返電。「君来すば万事休す」の電報にも小田原は微動もしなかった。

磐田原頭の再会

明治40年12月小田原の元に郷里から熊本歩兵聯隊に入営せよとの飛電が届いた。翌年2月の夜、小田原は盟友に送られ、人影疎らな土浦の駅を後にした。二人の結びれし縁の糸は裂帛の汽笛により9ヶ月でふつりと断ち切られた。遣澤校長の全人教育の理念を体得した二人は、この僅か9ヶ月の間に互いに信頼し協力し、土浦中学の基礎造りに大きな役割を果たした。小田原のその後の足跡は詳らかではないが、自分の教育の理想を貫徹するため私立中学校創設の夢と野望を胸に秘め朝鮮に渡り、龍山中学校に勤務していた。尾崎は、彼が去った後も3年余土浦中学校の教育に情熱を傾けその充実に尽力した後、44年東京・青山師範学校に転じた。

別れは、青天の霹靂

尾崎と潮来方面へ搜索に向かった。二人の乗った蒸気船が、夕刻潮来の堀割に入った時のことを、次のように述べている。「船上人語絶えて、両面真菰の中、虫声水底に湧く。気清くして俗塵を絶し、天来の神興月光と共に永劫に消えず。この時二人の影は甲板上に黒く印して動かず、亦一語も発することなく凝然として無心。若き二人には何等の野心なく、俗念なく、ただ青年教育者としての誇りがあり、何ものにも屈せない意気があった」と。小田原は、此の日此の時の無名の青年尾崎馬氏の姿を「私が私の秘宝として胸底深く蔵している尾崎楠馬氏の姿」とも記している。

人間教育の実践
三顧の礼に込めて教頭職に就いた小田原は、「大学予科や専門学校への進学ばかりに熱中して人の魂を信ず」

これは、平成15年発行の盤南高同窓会誌「尾崎楠馬先生50回忌特別号」の見出しの一つである。尾崎校長は、三顧の礼を以て迎えた小田原教頭と共に、大正11年4月見付中学校の開校に漕ぎつけた。二人の人間教育は見事な成果を上げ、4年8ヶ月後の15年11月開校式を挙行政した。開校式に於ける尾崎校長の式辞を次に抜粋する。
「本校創立以来人材の養成を以て教育の眼目とし、特異の校風を挙揚して此の目的を達成せんとし、外に生徒の勤労作業を奨励して質実剛健の気象を養うと共に、又能く環境を整理し美化し自ら高尚優雅の情操を培い、内には図書を充実して精神の糧を与え、以て知徳の啓発に資せんことを期せり。往昔校舎の落成せし当初は、…校舎の周囲は平蕪荒穢一木の見るべきものなかりしかば、学業の余暇生徒の力を以て樹を遠近より移し、…或は運動場を拡張し防風堤を築き水泳場を備うる等、悉く是血と汗との結晶より成れる開拓創造の跡ならざるはなし。此の間、生徒をして土に親しましめ、労働を重んじ秩序を尊び、逸を避けて労に就くの習いと…其の心身を錬磨すると共に自ら高雅闊達の性情を涵養する等、其の効果蓋しすくなくならざるべきを信ず」

「これは、平成15年発行の盤南高同窓会誌「尾崎楠馬先生50回忌特別号」の見出しの一つである。尾崎校長は、三顧の礼を以て迎えた小田原教頭と共に、大正11年4月見付中学校の開校に漕ぎつけた。二人の人間教育は見事な成果を上げ、4年8ヶ月後の15年11月開校式を挙行政した。開校式に於ける尾崎校長の式辞を次に抜粋する。
「本校創立以来人材の養成を以て教育の眼目とし、特異の校風を挙揚して此の目的を達成せんとし、外に生徒の勤労作業を奨励して質実剛健の気象を養うと共に、又能く環境を整理し美化し自ら高尚優雅の情操を培い、内には図書を充実して精神の糧を与え、以て知徳の啓発に資せんことを期せり。往昔校舎の落成せし当初は、…校舎の周囲は平蕪荒穢一木の見るべきものなかりしかば、学業の余暇生徒の力を以て樹を遠近より移し、…或は運動場を拡張し防風堤を築き水泳場を備うる等、悉く是血と汗との結晶より成れる開拓創造の跡ならざるはなし。此の間、生徒をして土に親しましめ、労働を重んじ秩序を尊び、逸を避けて労に就くの習いと…其の心身を錬磨すると共に自ら高雅闊達の性情を涵養する等、其の効果蓋しすくなくならざるべきを信ず」

ドカ中精神は建学のこころ



尾崎先生は、書画にも堪能



小田原先生と小田原山

養うことを忘れていたような教育では駄目だ。心と身体を鍛える教育をすべきだ」と校長に進言した。意気投合した二人は、何もない磐田原で零から出発し、真の人間教育を始めようと決意した。以下、第一回卒業生の回想等からその様子を見てみよう。
見中魂を核とした高い教育目標は、二人のどちらが欠けても達成できなかったと思う。小田原先生あつて初めて尾崎先生は生きましたし、尾崎先生あつてこそ小田原先生の『がむしやら』とも言える教育の実践ができたのだと思う。磐田原に移つてからは、「学園は自分たちでつくりなす」の合言葉の下に、校長・教頭が先頭に立つて、毎日放課後は1〜2時間鉄を握り、モソコ担ぎ・草むしりをし、運動場造りを始めた。作業後は、まだ石ころ混じりの運動場でクラブ活動に励んだ。正に「ドカ中」のスタートだ。二人が目指したものは、勤労・鍛錬の労作教育を通しての人間教育である。先生も生徒も一緒に汗を流し一つの事を成し遂げる「師弟同行」の下に、当然生徒達も燃えたとと思う。その労作教育は、更に校庭の拡張工事へと進んでいった。原野を切り開いた運動場の砂埃を防ぐために、教頭の提言によつて幅十〜四〜五尺、高さ六尺、延長一五〇尺の大防風堤造りも併行して始まった。こども「師弟同行」の作業が進められた。校長先生も真つ裸になつて背中を日に照らされながら、生徒と並んで草取りをした。校庭の拡張と防風堤造りは、全部生徒の手で行った。土方仕事ばかりやらせて勉強をやっているのかという批判は当然起きた。第一回卒業生から次々と優秀な上級学校に合格者が出るに及んで風向きは変わった。
防風堤の一番北の角の高い所を、「小田原山」と呼んでいる。そこには、「小田原教頭の顕彰碑」が建てられている。小田原教頭は、怖い先生と思つている人が多いようだが、見中三回生のアルバムの一頁に「吾等の小田原先生」と題された一枚の写真がある。実は、「吾等の」と言う詞から分かるように生徒から慕われていた。校長の右腕として悪役を引き受けていたのである。